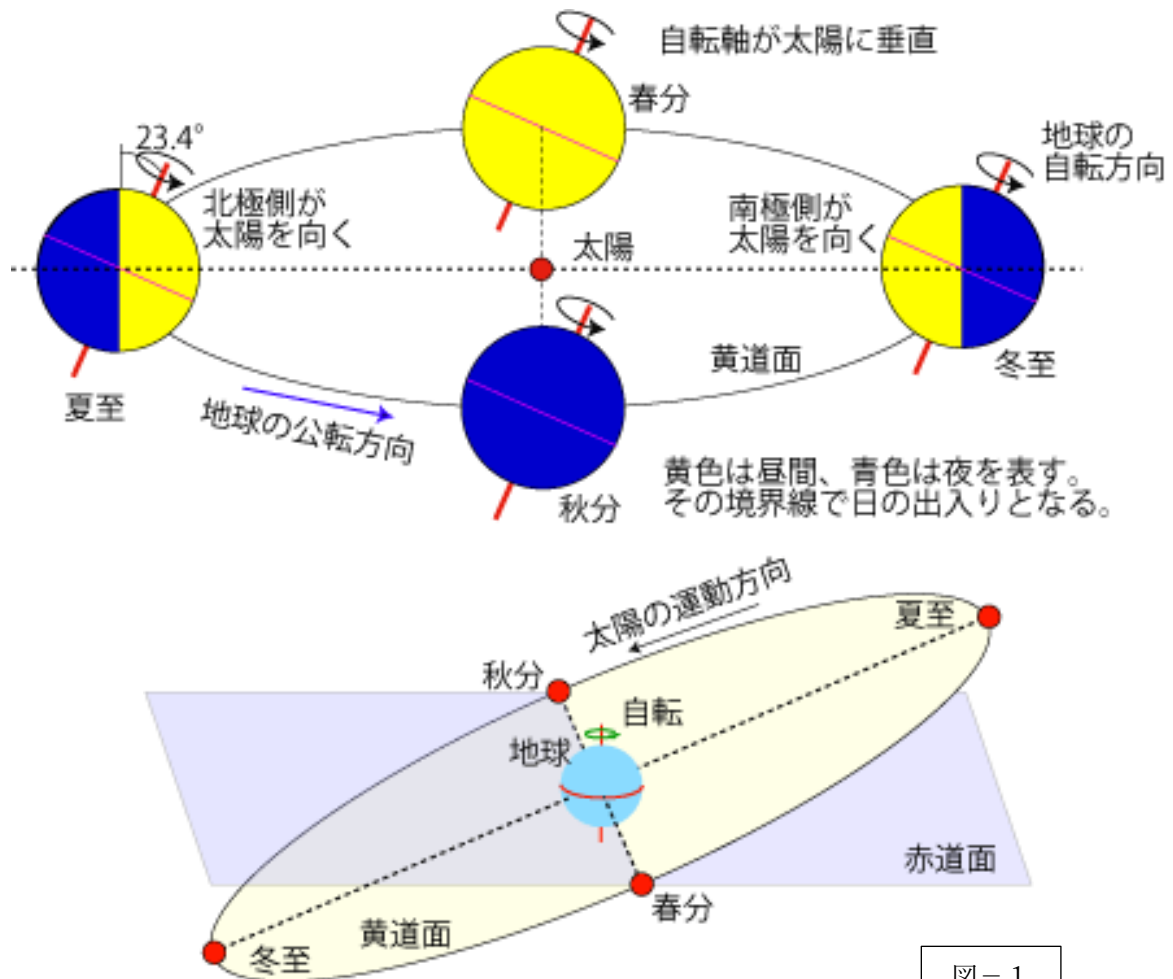


「太陽と月と地球」の相関運行

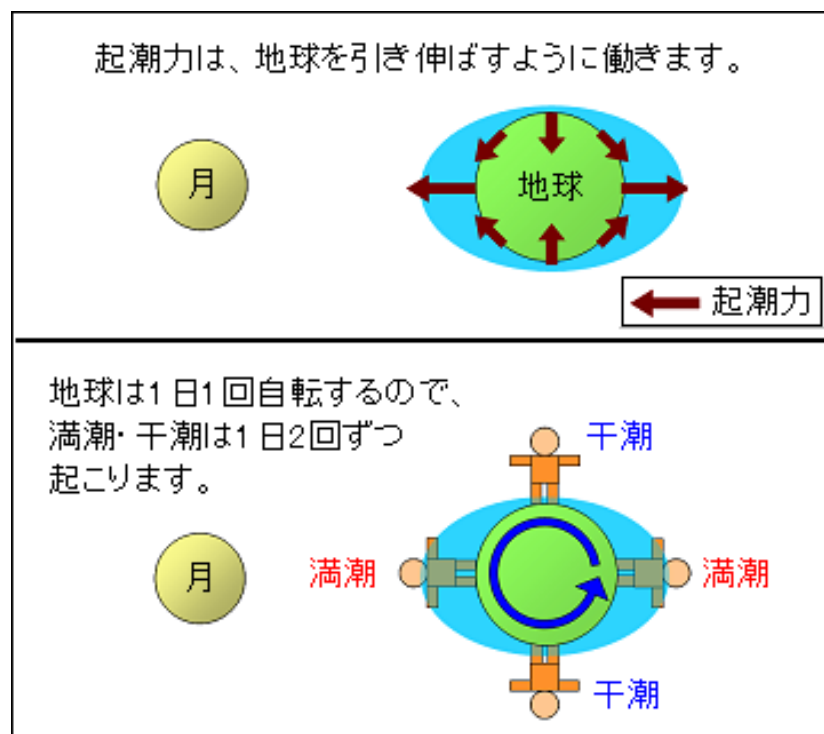
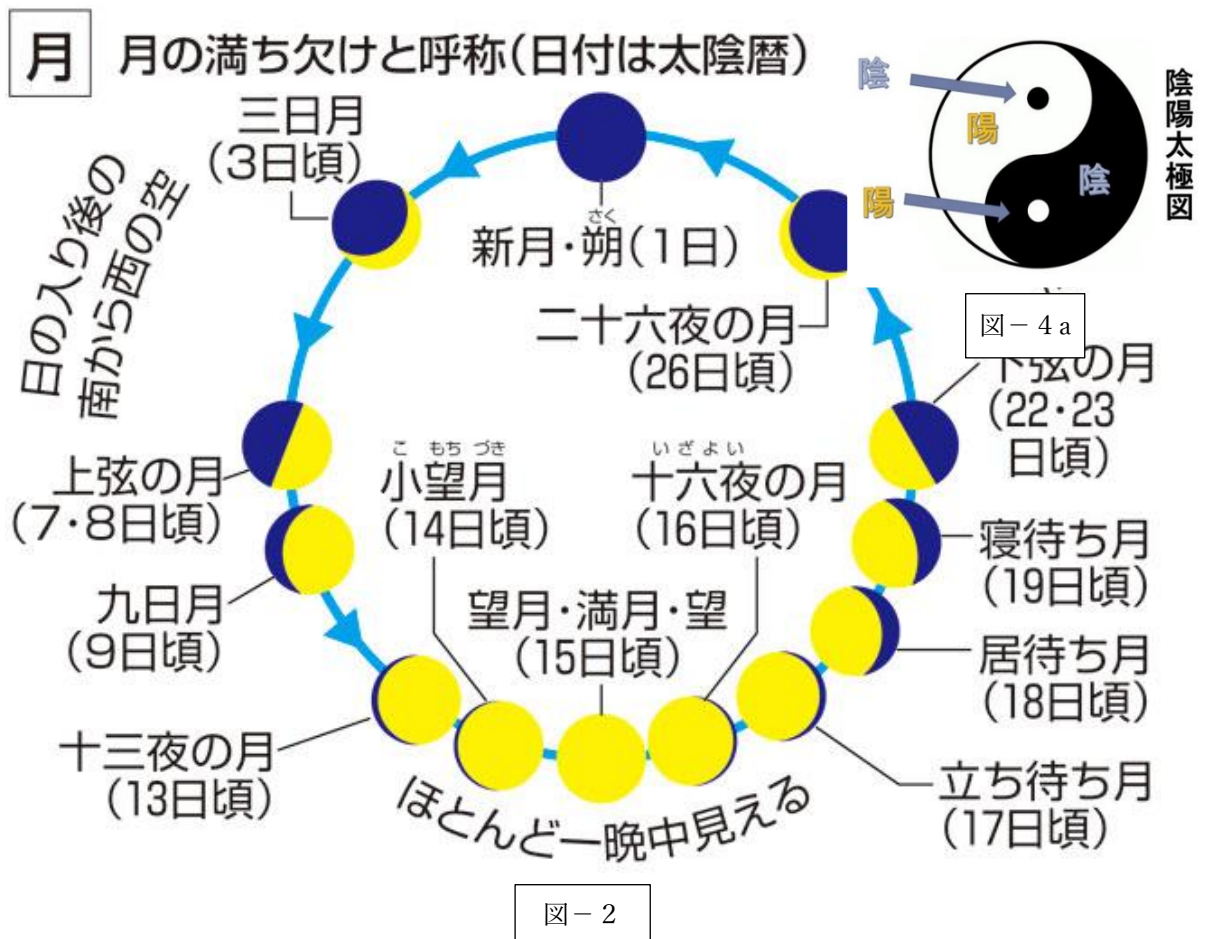
日本神話や中国古典（古代信仰）に登場する「日・月」であるが、運行について科学の面も取り入れて取り上げる。往時は、今の地動説ではなく、天動説だったでしょうが、地動説が日本に伝来したのは寛政の改暦前後の頃という。どっちにしても、地球上の人間の目から見た日月星辰の動きは、東から西に回る。図－1は国立天文台理科年表オフィシャルサイトより、図－2は「コトバンク」より、図－3は気象庁HPより拝借・引用する。



図－1

その1；昼夜・季節、昼夜は地球の自転により、季節の変化・循環は、地球が自転軸を傾けたまま太陽を公転することによって生じる。

その2；暦、時間に対して、人間活動に有用性を持たせるための節目を入れたのが歴（こよみ）であるが、江戸期まで採用した太陰暦と明治以降に採用している太陽暦がある。日本は、明治五（1872）年11月9日発布の太政官布告第三百三十七号により、従来の太陰暦を廃し太陽暦を使うこととなった。太陰暦は、月の満ち欠けの周期を基にした暦（暦法）であり、その周期を朔望月といい、1朔望月29.5日を1か月とした。太陽暦は、地球が太陽の周りを回る周期（太陽年）を基にして作られた暦（暦法）であり、言うまでもなく、1年を基本的に365日とし、12か月に分けている。



その3；潮の干満、月（太陰）に係る、満ち欠け（朔望）と海潮干満のこと。満ち欠けは、月の公転によって地球から見た太陽と月の位置関係が変化することで起こる現象である。洋の東西を問わず、日に日に月が姿を変えて行くのを数えることで暦（太陰暦）が誕生した。干満の潮汐が起こる主な原因は、月が地球に及ぼす引力と、地球が月と地球の共通の重心の周りを公転することで生じる慣性力を合

わせた「起潮力」である。なお、太陽も潮汐に影響しているが、影響は月の半分かくらいとされる。

その4；月と女性、月と女性はとても相性がよいとされるが、それは、新月・満月（朔望）のリズム29.5日と月経（排卵期）の平均的リズム28日がとても近いことから来ている。精緻を問い詰めれば諸説ある。

図-4、ところで、月の満ち欠けの次の人生訓が浮かぶ。そもそも、月は自ら発光しているのではなく、上記のとおり、太陽と月との運行において太陽光の反射を人間が視覚で認識した結果なのである。その月の満ち欠けは定期的・周期的に同様の状況・現象が起こるという訳である。

日（太陽）と月（太陰）のこと、日（太陽）は皇祖神に繋がる日向の存在、対して、月（太陰）は日陰の存在だった、しかし、月は文芸で重宝されて来たように「満ちては欠ける、欠けては満ちる」月（太陰）は日陰の存在ではあるが、人生訓にはとても貴重な存在（現象）である。

「満ちては欠ける」⇒ 成功し絶好調は永遠ではなく、やがては衰退して行くものである。
増上慢・傲慢は、まもなく（やがては）凋落するものだ。

「欠けては満ちる」⇒ 失敗し意気消沈しても永遠ではなく、やがては成功のチャンスは来る。
謙虚、自戒・自省を心底念ずれば、必ずや他者承認を得られるものだ

これでさらに連想するのが、私の造語「仏魔同居」である。
私の心には仏性、すなわち慈悲とか真善美に対する欲求とか、利他の心とか、無償精神とかが宿っていることを自覚する。他方、私の心には魔性、すなわち、見て見ぬふりとか、粗暴な一面とか、自利の心とか、損得・打算とかが宿っていることを自覚する。つまり、対極的な仏魔精神の同時存在を意識出来る。

陰陽（功罪）両面があるからこそ希望と期待が生まれるものである。

天地人三才、宇宙は陰陽相対(待)原理で運行・現象が生じ、陰陽太極図のとおりで「陰中陽有り、陽中陰有り」が貫徹・貫流している、人間の心もまったくそのとおりに支配されている。したがって、本来の人間精神は左右のどちらかに固定することはできなくなっているのだが、経験による知識が^{さが}残滓化して、心が何かに執着し、偏った性格に陥っているのが性である。しかし、こういう根源的精神構造を認識すれば、思想信条（宗教心）をどこかに固定することが不自由さや弊害を齎す原因だと気付くものである、また、心の満ち欠け・抑揚は人間にはもちろんのこと、あらゆる生物にも具有するものなのだ、と気付けば時が解決するものである。このような精神構造をきちんと認識しないからいつまでも迷路から抜け出せなくなるのである。

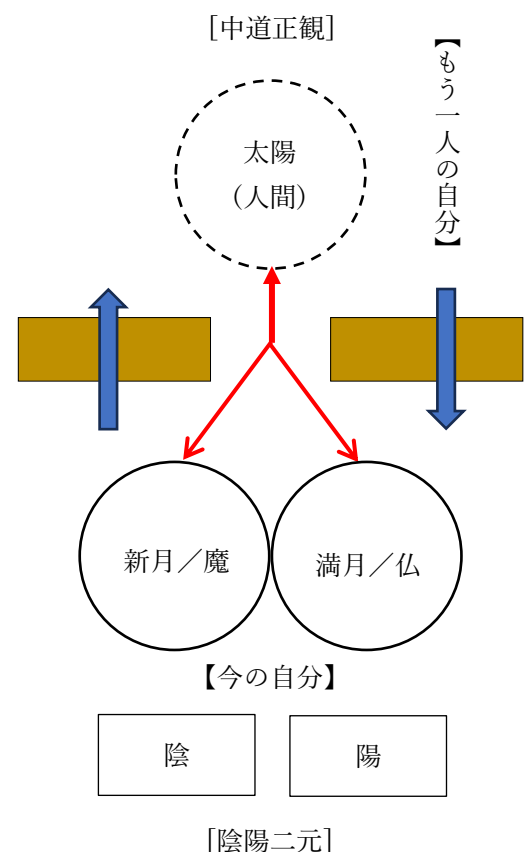


図-4

(end)